都市の類型と、その構造の検討
中世期における博多編　要旨

文学研究科文化財学専攻
松浦由佳

本稿では、大友氏の進出によって、博多浜から息浜に向けてまちの発展がみられた 16 世紀の博多を対象に、都市の構造的側面での特徴や他都市との類似点などが存在しているのか検討した。

検討方法は、都市領域内に在る井戸を中心とする水場の位置や分布から人々の生活領域を推定している。確認されている井戸跡は、古いもので凡そ 8 世紀まで遡り、新しいものでは近現代ものも確認された。その中で、10 世紀から近世以降の時期を 4 つに分類し、検出割合を算出した。

日宋貿易期とした10世紀から13世紀の時期では、主に博多浜の中心部に集中した分布が確認された。特にその中でも集中していた箇所は、北西側の、当時の西の海岸線付近の場所で、鴻臚館廃絶後に門戸としての役割を担った博多の中でも、宋人が居住した空間に想定される領域に当たる。元寇襲来後から手工業が発達した14世紀から15世紀では、10世紀-13世紀に集中した分布がみられた博多浜の中心部から、聖福寺の北側に当たる部分と、博多浜西に位置する部分に分布が確認された。また、息浜にも分布領域がみられるようになり、その分布領域が妙楽寺や聖福寺など寺社領域であったことから、この時期ごろから、「寺社の井戸」のが存在したのではないかと推測した。各地の領有争いが一層激しくなる戦国期の16世紀から17世紀になると、息浜の方にも顕著に井戸遺構が検出され始めた。特に博多浜と息浜のくびれ部分の北側と、14世紀から15世紀の分布に確認された寺社領域周辺に分布が確認できた。寺社領域周辺に関しては、博多浜と息浜くびれ部と比較して、極端に集中した分布がみられるわけではないが、同様の場所に分布が確認できることから、一定期間井戸が造営され続けていることがうかがえる。また、くびれ部付近の集中部分については、博多遺跡群における工業製品（炉壁や滓）などの分布調査資料から、取鍋・坩堝・鞴の羽口・滓・銅製品・砥石が多く出土することが確認されているため、工場に属する井戸とも検討している。

これらの分布データから、井戸の造られる場所の変遷をみてみると、博多浜中心部西側で造営され始めたものが、徐々に東側へ移り広がり、その後息浜にも分布し始めるという変遷を辿ることができた。今回、本稿の主たる目的である、都市領域の構造面での特徴については、明確なデータを得ることができなかった。井戸が作られる場所の移動や、集中箇所と道路状遺構との関連性、また建物跡との比較検討を実施する必要があり、今後の課題としたい。